【ヨシ霊】みるくびおる【鳥、芹、守エ、モ、鷹→霊】

【ヨシ霊】みるくどぉる【島、芹、守エ、モ、蘆→霊】

朱音

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=21293948

R-18, 二次創作, 腐向け, モ腐サイコ100, ヨシ霊, 年齢操作, 本番無し

※ブルセラ、スカトロ(小を飲む程度)、攻めフェラ、女装(師匠)、搾乳プレイ、乳牛化、おもらし、春売り、寝取らせ、総受けを含みます。
※架空の設定上、師匠の陰茎を恋愛感情の無いネームドキャラ達が絞り、出た人乳を飲みます(飲む描写はありません)
※ヨシ霊に加えて、島、芹、守エ、大人モ、蘆→霊があります(相思相愛はヨシ霊のみ)
※本番無し

※衛生的に問題のある行為のため、絶対に真似しないで下さい。

◇「愛らしいち○ち○からは、飲めるミルクが生成される！」

感想頂けると跳ね飛んで喜ぶ妖怪です。
一言、長文、発狂？うぇるかむ(｀・ω・´)
マシュマロ：https://marshmallow-qa.com/hiiragi_syuin

Table of Contents

【ヨシ霊】みるくどぉる【島、芹、守エ、モ、蘆→霊】

「愛らしいちんちんからは、飲めるミルクが生成される！」

ここはそれが普通で日常の世界。
人間が飲めるミルクを陰部から生成する。そんな特異体質が存在する世界の、霊とか相談所でのお話である。

その日、蘆舅道然（ろしゅうとどうぜん）は半ばスキップで霊とか相談所に向かっていた。何度も通ってやっと手に入れたチケットを使うために。

「来てやったぞ、霊幻新隆！」

勢いよく開かれた扉の先では、事務机に座った霊幻の陰茎から、眼鏡の男がミルク瓶に人乳（じんにゅう）を注いでいるところだった。

「んっ、んん……はっ、いっぱいになったか？」

薄い色の陰茎を整った手が扱（しご）き、透明な瓶が満たされるタイミングで動きがとまる。

「うん、このくらいかな。ご馳走様」

眼鏡の男は長期間保存が可能な相談所特製のミルク瓶に蓋をして、財布から千円札を取り出し、霊幻の斜め後ろに控えていた強面の男、エクボに渡す。

「まいどあり」
「じゃ、また無くなる頃に」

「カフェインも入ってるんだから飲みすぎるなよ羽鳥〜」
「分かってるよ」

眼鏡の男は、扉を開きっ放しだった蘆舅（ろしゅうと）の横を抜けて部屋を出て行った。

「何だ蘆舅、さっさと入れって。霊幻が寒いだろ」
「あ、ああ……すまない」

エクボに急かされた蘆舅が扉を閉めると、エナドリの甘ったるい匂いがその鼻を掠（かす）めていく。

「いらっしゃい、直売には早くないか？」
「初参加だからな、どんな場所でも粗相があってはいけない」
「へぇへぇ、どうせ寂（さび）れた相談所ですよ」
「霊幻さんいる？」
「ん？ショウ君、いらっしゃい」

懐っこい声をした背の高い青年、ショウが、閉まったばかりの扉を開きひょこりと顔を出した。

「いつものもらっていい？」
「了解、その苺ミルクもらうぞ」
「はいはーい」

ショウは片手で持っていた苺ミルクを霊幻に渡し、もう片方に持っていた相談所特製ミルク瓶の蓋を開ける。羽鳥の時より少し大きめサイズだ。

「よし飲み終わった。搾（しぼ）っていいぞ」
「じゃあ頂きます」

瓶の口を霊幻の陰茎に添え、柔く優しく扱いていく。

「んぁ……ふっ、しょ、君」
「んー？」
「ご両親は、元気、か……？ぁう」
「2人とも元気。霊幻さんの苺ミルク楽しみにしてたよ。俺もね」
「そう、か……ぁ、あ……どうだ？」
「サンキュー霊幻さん。ほい、お代」

たぷん、と揺れて収まった苺ミルクを確認して蓋をしたショウが、財布から二千円取り出してエクボに渡した。

「まいど」
「じゃ、またな」
「おー、風邪ひくなよー」
「霊幻さんもね」

ショウは蘆舅の横を通り過ぎる際、霊幻達には聞こえない小声で忠告する。

「霊幻さんに生唾飲むのは勝手だけどさ、何かあったら元爪のボスと俺が相手になるぜ」

「ま、霊幻さんのこわーい恋人を倒せたらだけど」そう笑って相談所の扉を閉めた。
恋人？恋人がいるのか？
ブルセラ直売もしているのに？

「よぉ霊幻、元気してたか」
「おー森羅、今日は何も持ってないな？」
「森羅さん！？」

疑問を浮かべる蘆舅の横を、小太りの男、森羅が「お前もいたのか」と通って行く。

「お任せコース飲みたくなってな」

「今日は」
「待て待て、帰って飲んでみてから何が混ざってるのかを考えて楽しみたい」
「了解。エクボ、頼む」
「はいよ」

霊幻の斜め後ろから真後ろに移動したエクボが、シャツとネクタイだけを身につけている体の脇の下から手を伸ばす。
森羅の添えた瓶の口に霊幻の陰茎をあて、わずかに漏れていた人乳を潤滑剤代わりに扱き始める。

「んっ、えく、ぼ……っ」
「悪いな霊幻、エクボ」
「ぁ、いい、よ……おまえ、ほんといいヤツだよ、な……ぁ！」
「俺様は役得だから構わねぇよ」

くちゅくちゅと水音を立て、じょーじょーと搾り出される人乳で瓶が満たされる。

「十分だ、ありがとうな霊幻」
「美味しく飲んでくれりゃあいいって」

森羅は財布から千円札を出し、ウェットティッシュで手を拭（ぬぐ）ったエクボに渡す。

「まいどあり」
「じゃあな、風邪ひくなよ」
「お前もな」

先程霊幻からショウに向けられた言葉が、今度は森羅から彼に返ってくる。
その事に、彼は狐色の髪を揺らし楽しそうに笑った。

＊＊＊

霊とか相談所は霊能関係、人乳（じんにゅう）販売の他にもう１つ、特別なチケットを手に入れた者のみに許された、ブルセラ直売所の顔も持っている。
人乳販売も霊幻自身や所員達に選ばれたもののみに行われるが、ブルセラ直売は更に選（え）りすぐられる。
主に、強力な力を持ち、霊幻新隆に恋愛感情を持ち、金や権力、その他諸々、放っておいては厄介な事になるもの達が選ばれる事が多い。
蘆舅道然は、このレア中のレアチケットを手に入れて浮き足立っていた。

夜の相談所、ブルセラ直売の時間に集まったメンバーの異様さを肌で感じるまでは。

朝から人乳の客に陰茎を搾られる霊幻を見続け、蘆舅の蘆舅は限界だった。持参した昼食も興奮のあまりわずかしか喉（のど）を通らない。
夜になり、待ちに待った直売の時間になると、普段は呪術クラッシュ、マッサージを施（ほどこ）す部屋に通される。
部屋に入る前に感じた煙の匂いは何だろうという疑問が吹き飛ぶくらい、そのメンバーは、端的（たんてき）に言えば化け物揃（ぞろ）いだった。

元爪のメンバーであり相談所所員である芹沢克也、同じく元爪のメンバーである島崎亮。
人乳搾りの間、ずっと霊幻のサポートをしていた相談所所員のエクボと、最強と言っても過言ではない威圧感を放つ、同じく相談所所員の影山茂夫。
決して能力が高い訳ではない蘆舅は、圧倒的な力の差という冷気に、つい先程までの熱が鎮火していた。

「まぁそうかたくなるな。荒事にはならないように、俺のお巡りさ

んが部屋の外で見張っててくれるから」

最後に入って来た霊幻が蘆舅の肩をするりと撫でていかなければ、体が硬直したまま終わっていたかも知れない。
折角のブルセラ直売が。

「じゃあ始めようか。今日は古式ゆかしきブルマーだ」

わっと、部屋に熱気がこもる。
言葉の通り、霊幻はその白い肢体に深い紺色のブルマーを着用していた。上はボタンの外れたシャツを一枚、申し訳程度に着ている。
両の耳では、銃を模したイヤリングが、リン、と揺れた。

「さ、誰からくる？」
「いかせてもらいます」

最初に名乗りを上げたのは芹沢。それと同時に、手にしていたチケットがチリになる。

「これ、生で着てるんですか」
すり、と、霊幻の鼠径部（そけいぶ）を、ブルマーにそって長く太い指が滑っていく。
ひくりと震えた体は熱を孕んでおり、発情したダークグレーの瞳がとろりと蕩（とろ）ける。
「そ、うだ、ぁ……もう少し、優しく」
芹沢が大きな掌で陰茎のある辺りをそっと撫でていたところに肯定の言葉が返り、思わず握り込んでしまった。
「わっ、すみませんっ」
「大丈夫、はぁ……ふっ、素直な芹沢はいいこだな」
「っ」
「あー、残念だったなぁ」

柔らかなテノールに褒められ、よしよしと頭を撫でられた芹沢の腿（もも）がひくりと震える。達してしまったようだ。

ブルセラ直売ルールの１つ、客側が達したら終了が適用される。買取失敗だ。

しくしくと涙しながら後ろに下がる芹沢と交代で、シャツまで黒で揃（そろ）えた長身の青年、茂夫が、霊幻の広げられた足の間に進み出た。
チリになったチケットがさらさらと流れて消える。

「モブか」
「はい、新隆さん」
「お、っと……いきなりそれは、ずる、い」
「ふふ、何でもしますよ……貴方に怒られない範囲でなら何でも」

かつての少年が、未だ霊幻の記憶にある高かった声が、好青年の色に塗り潰されていく。

「んぁ、はっ……ん、ふ」

開かれたシャツに広い掌が差し込まれ、脇腹から胸までを整えられた爪先が辿（たど）っていく。すり、と、親指の腹が乳輪を擦り上げ、乳頭を撫でた。

「師匠」
「も、ぶ……あ、んっ、ふ、あはは、残念」
「あ〜……！」

陰茎部分を柔く揉みながら耳元に吹き込まれた"師匠"の愛称に、霊幻が笑みを深める。
濃紺のブルマーには、その色を更に深く濃くする染みが出来ていたが、同時にふわりと甘いミルクの香りが舞った。

ブルセラ直売ルールの１つ、霊幻が人乳を出したら終了が適用される。影山茂夫、買取失敗である。

「折角ギャップ萌えを勉強してきたのに！」
「興奮して油断したなぁシゲオ」

後退する茂夫の肩をぽんぽんとしたり顔で叩き進み出たのは、強面で耳の欠けた男、エクボ。

「は、ぁ……エクボ」
「おー、疲れてるとこ悪いな。だがまぁ、これでフィニッシュだ。ブルマーは俺様がいただく」
「何言ってん……んっ、あ」

ちゃり、と、銃を模したイヤリングが鳴く。頬を滑る武骨な手が、イヤリングに触れて後頭部にある髪の生え際を撫でた。
ちりちりとチケットが消えていく。

『チッ』

防犯のために通信機の役割を果たしているイヤリングから、隠そうとしない舌打ちが漏れ聞こえた。

「お前さんのお巡りさんはご立腹だなぁ」
「えくぼ、あんまりからかうと、ひぅ！」

耳に滑り込んだ舌がぬちゅりと音を立てて鼓膜を揺らし、次第に下がる唇が顎下を執拗に吸う。

「だ、め……痕は、だめ……もっ、出禁」
「悪い、反応が面白くてつい、な」

「後でお巡りさんに確認してもらえ」と、上に戻った頭が濡れた耳孔（みみあな）にバリトンを吹き込んだ。

「ひゃあ、あ！」

「おっ、と……あちゃ～……」

じわりじわりと濃紺のブルマーに滲むのは、甘い匂いの人乳ではなく、生臭さのあるとろりとした白濁液。

「はっ、はぁ、は……ざまぁない、な」
「違いねぇ」

「まぁ、その蕩（とろ）けたエロい顔見れたから構わねぇよ」そう言ってエクボは最後にイヤリングに口づけ後ろに下がった。

ブルセラ直売ルールの１つ、霊幻が精液を出したら終了が適用されたエクボ、買取失敗。

「では私が」

霊幻の痴態を見ながら達する失敗者に囲まれ、残り2人のうち1人、蘆舅は固まってしまっている。それに顔を向けた島崎が、霊幻に向き直り前に進み出た。
手から離れたチケットがはらはらと消える。

「お巡りさんはいいのか？」
「貴方のお巡りさんは、ここに集う強力な能力者達総てを相手取る事は出来ない。けれど間違いなく貴方に愛されている」
「し、まざ……んっ」

芯を揺らす濃密な声が、霊幻の淡く色づく首筋を擽（くすぐ）る。

「貴方を無理に奪えば貴方は手に入らない、彼を殺しても貴方は手に入らない」
「そ、だな……そんなこと、したら……自さつす、ぁ、う」
「だからここに暴力は持ち込めない。何であれ、誰であれ」

唇が皮膚を薄らと撫ぜていく。吐息と声が白い肌を掠（かす）める

度に、ひくひくと肢体が揺れた。

「ひっ」

すぅ、と、脇の下に差し込まれた鼻が、深く呼吸する。

「そうは言っても、頭の回るあのお巡りさんは特別怖い。今回は私がいただいて、大人しく去りますよ」
「う、そ……や、やだっ、や、んっ！」

鼻先が汗の浮く白い腹を通り、ブルマーに沈む。腿（もも）を掴んだ両手で股を大きく開かされたその後に、膝裏へ回った腕が頭を挟む形を取らせる。

「気持ちいいですね、貴方の腿（もも）」
「んんっ、ん、しゃ、喋らな……っ」

すぅ、はぁ。
すぅ、はぁ。

汗と、白濁と、人乳の混じったブルマーの匂いを、胸いっぱいに、何度も嗅がれた霊幻の陰茎が。

「ひゃぅ、や、あ……あ、ああっ、ヤ、ぁあ！」

しゃあああああ。
と、勢いよく排尿した。

「たくさん出ましたね」
「うっ、うう……ぁ」

目の見えない男がどうするのか。
手にしていたティッシュを握りながら失敗者達が見守る中、霊幻は勢いよく尿を漏らす。

濃紺が大量の水分を吸って深く黒に染まった中心に口づけた島崎が、股の間から満足そうに立ち上がった。

ブルセラ直売ルールの１つ、特異体質の霊幻を羞恥で染め、排尿させた最初の1人のみ、買取成功。

「そこまでだ」
「よしふ」

買い手が確定した瞬間扉が開き、坊主頭の男、ヨシフが施術室に入って来た。手にした大判のバスタオルをぐったりとした霊幻に被せ、その上から着ていたジャケットで包み抱き寄せる。

「おや、今日は手ずから脱いで袋に入れてくれるサービスはないんですか？」
「霊幻が疲れている、嫌がっている場合はどんな理由があろうと終了だ」
「残念」
「買い取れた上に俺からも逃げおおせるんだから文句言うな」
「はいはい」

部屋に漂っていた卑猥な匂いが、開け放たれた扉と、ヨシフの燻（くゆ）らせていた煙草の煙で霞（かす）んでいく。
失敗者達が、次こそはっ、と、精子の残骸が滲むティッシュを握り締め、用意されたゴミ袋に放り霊とか相談所を後にする。
今回の勝者である島崎は、霊幻の脱いだブルマーを受け取り、用意されていた相談所特製の袋に入れ満面の笑みでテレポートした。

「で、お前はどうする」
「え……？」
「なにもしてないだろ……ナニは、したみたいだが」

残された蘆舅は、ヨシフに声を掛けられてやっと我に返った。そっと霊幻に下半身の状態を見られて、思わず両手でキュッと股間を隠

す。
淫靡（いんび）な空間の熱と霊幻の痴態に、ほとんど無意識で陰茎を擦り、他のメンバーと同じく達していた。

「はじめててにいれたチケットだろ？」

蘆舅が選ばれた1番の理由は、霊幻と同じ特異体質のものが安心して飲める薬を作るための、研究施設とスタッフを持っているから。しかしあの面々に囲まれては、萎縮せず名乗り出ろという方が酷だ。
霊幻の、せめてフェラしようか？という言葉に肩が震える。彼を抱き締めるお巡りさん、ヨシフからは抑え切れない圧が漏れているが、仕事だし、コイツが言うなら仕方がない、という雰囲気も窺（うかが）えた。

「いや、それはフェアじゃない。なぁに、次手に入れるのは私だからな！」

わははと元気に笑った蘆舅は、霊幻の言葉と姿に少しだけ硬度を持ってしまった蘆舅を庇いながら相談所を後にした。
去った後には彼が握り締めていたチケットだったのもが残され、それも直ぐにチリとなって消えた。

＊＊＊

「おつかれさん」
「ん」

2人きりになった施術室内のベッドに、ヨシフが霊幻を押し倒す。優しく、身体にこれ以上負担のないように。

「まだ少し残ってる」
「了解、ここで出してくか」

霊幻を包んでいたバスタオルとジャケットを下敷きに横たわる肢体

に、ちゅ、ちゅ、と口づけていく。それを先行するように、ヨシフの首に下げられたライターが、熱（ほて）った肌に冷えた足跡を残す。

「ヨシフ、あご」
「ん」

エクボに吸われた顎下を覗いたヨシフが、痕はついてない、大丈夫だと狐色の髪を梳（す）いた。

「やらないだろうとは思ったけどな」
「ヨシフに確認して欲しい」

ヨシフという恋人のいる霊幻の体に、所有印をつける事は許されていない。霊幻が言おうとしていた通り、出禁になる。分かっていてそんなヘマはしないだろう。
施術室での即売中、ヨシフがその場にいる事で"恋人に見られながら違う男に体を許している"という羞恥を引き出させないためにも、彼は基本、事務所側にいる。
それでも、霊幻が精神的や肉体的に疲れ嫌がっていると感じたり、参加者からの暴力行為が行われた場合、直ぐに駆けつける事が出来るよう、武器でもある煙草を燻（くゆ）らせながらイヤリングを通して状況を確認していた。
扉一枚隔てた先に恋人がいる、エクボはその事実を羞恥のスパイスにしようとしたのだろう。ヨシフが小さくでも呻（うめ）けば、霊幻の耳元では恋人の声がするのだ。
悪霊とはよく言う。
ヨシフと霊幻の反応が面白い、というのも本心だろう。

「ん、んぁ、ふ……んん」

ちゅ、ぢゅ、と、白い肌を下っていったヨシフの唇が、霊幻の陰茎に辿（たど）り着く。

「声出していいぞ」
「んゃ、で、もぉ……くっ、ぁ」
「人乳出してる最中ですら聞かせてくれるのにな」
「だ、てぇ……よしふ、だから、アッ、ん」
「分かってる、意地悪言ったな」

震える陰茎を含み、唇を使って緩く上下に扱く。たらたらと溢れるのは、精液と、人乳と、尿。
霊幻が思わず縋（すが）りついたのは、下に敷いていたヨシフの匂いが染みつくジャケット。

「はっ、あ……あっ、んぐ、ふっ」

口から陰茎を解放し、片手で陰嚢を揉みながらもう片方の手で雁首を擽（くすぐ）る。それだけでもあらゆる体液で濡れそぼった腿（もも）が震えているというのに、いっぱいまで伸ばされた舌が、裏筋をべろりと舐め上げた。

「きゃ、ん！よ、し……ふ、ぅ！やらっ、やらぁっ、ア！あああ
あ！」

散々男達に熱（ねっ）され、発情に燻（くすぶ）っていた身体が、愛しい男の奉仕に歓喜の涙を迸（ほとばし）らせた。

「ひ、ぅ……ぁ……あ、はっ、はぁ……はぁーっ……」
「ごっそさん」
「っ、ば……か、ぁ」

羞恥と、欲と、愛しさと。
総て混ざった体液を、ヨシフはこれぞ極上と呑み干す。口の端を伝った白も、形のよい骨ばった指が拭い、一滴残さず喉（のど）を通した。
首筋に、鎖骨に、脇腹に。
ちゅ、ちゅ、とキスが降る。時折ぢゅ、ちゅる、と吸っては舐め

て、赤い花弁が散らされた。
すべて愛しいと瞳を細めたヨシフが、白に散った狐色の髪を撫で、置いてあったティッシュなどで体を清め始めるので、霊幻は疲労に虚ろな瞳を向ける。

「よしふは」
「ん？」
「それ」
「気にするな。久し振りに排尿したんだ、疲れてるだろ」

ぽんぽん、と。まるで幼子（おさなご）をあやすような手で頭を、頬を撫でられて、瞼（まぶた）が重くなった。

「……あした。あしたやすみだから、いちにちすきに」
「無理しなくても」
「いやだ、ゆずらない。あした、ぜったい……だって、おれのこいびとは……」

ヨシフだから。

落ちる前に、伝わっただろうか。
きっと伝わっただろう。
ヨシフの体温が、霊幻の身を強く抱き締めたのを感じたから。

＋＋＋＋＋

＊＊＊平和？なまま終わりたい場合はここまでで終わる事をお勧めします。お付き合い頂きありがとうございました。

裏設定にお付き合い頂ける方は次のページへ＊＊＊

後日。

受け取った代金は、霊幻と同じ体質に苦しむ人のため、排尿管理薬研究費として。
唯一現存する、高額であるのに副作用が酷い排尿管理薬代として。
人乳代と共に支払われる。

羞恥が無ければ排尿出来ない。不用物を体から出す事が出来ない。
同じくらい生成される人乳も、定期的に搾（しぼ）らなければ身体に負担がかかる。にも関わらず、身体を巡る血液と同じ成分から作られるため、出し過ぎても貧血を起こす。
彼らが摂取する牛乳は本当の意味で生命線だ。
何故その体質が存在するのか、どのように生成されているのか、詳しくは分かっていない。
分かっていないものを、人は心の底から蔑（さげす）む事が出来る。
人乳体質と名付けられたそれを、人は人にあらずと、己よりも下が現れたと安堵（あんど）するのだ。

病気と避け。
家畜と蔑み。
変態と罵（ののし）る。
ミルクドールという者もいれば、乳人（にゅうじん）と笑う者もいる。
己でなくて良かったと、真にワラうのだ。

これは、そんな世界にある、霊とか相談所でのお話である。

＋＋＋＋＋